



彩湖、サンマルコ広場

2020 年

インクジェットプリント

[左] 1500 x 1998 mm [右] 1500 x 1994 mm

ある被写体の時間的な変化を数百枚の連続写真によってとらえ、そのプリントの束をカッターなどで彫り込む制作手法で注目された Nerhol の、シグネチャー・スタイルの作品。

2 点 1 組の作品で、左側は 2019 年の台風 19 号で水没した彩湖・道満グリーンパークを撮影した映像、右側はヴェネチアのサンマルコ広場がアクア・アルタで浸水している様子を撮影した映像が素材となっており、2 つの場面の水面がそうように展示される。この時期の Nerhol は、「レジリエンス」（＝困難や逆境に直面したときにしなやかに乗り越え回復する力）をテーマとして制作しており、荒川の増水に備えた彩湖公園の調節池機能と、満ち引きによる浸水を前提としたヴェネチアの都市設計に、共通項を見出したという。

なお、本作品は 2020 年に当館で開催した、5 組の作家によるグループ展「New Photographic Objects 写真と映像の物質性」のために制作されたもの。



[左] carve out / E.M 143a [右] carve out / E.M 631a

2023 年

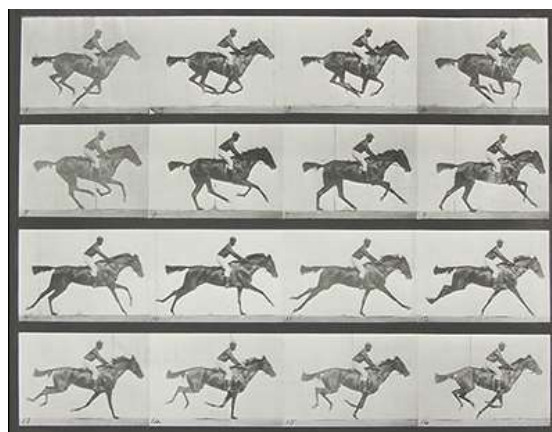
レーザープリント

[左] 224 x 108.5 x 3 mm [右] 174.5 x 224 x 3 mm

イギリスの写真家エドワード・マイブリッジ（1830-1904）が考案した装置によって撮影された連続写真を素材にしたシリーズ作品「carve out」からの2点。

マイブリッジは、人物や動物のさまざまな動きの撮影に取り組み、膨大は数の連続写真を生んだことで知られる。学術的な功績のみならず、後の芸術家にも大きな影響を与え、マルセル・デュシャンやジャコモ・バッラの絵画は、マイブリッジの連続写真を参照して描かれたといわれる。

Nerhol はマイブリッジの十数枚の連続写真を一枚ずつ印刷して積み重ね、像を崩すように彫り込んでいくことで、連続写真とは異なる時間軸の生成が試みられている。



[参考] エドワード・マイブリッジ

《ギャロップ、サラブレッドの鹿毛の牝馬、アニー・G》

1884-85 年撮影 〈アニマル・ロコモーション〉より



Cornus florida linn

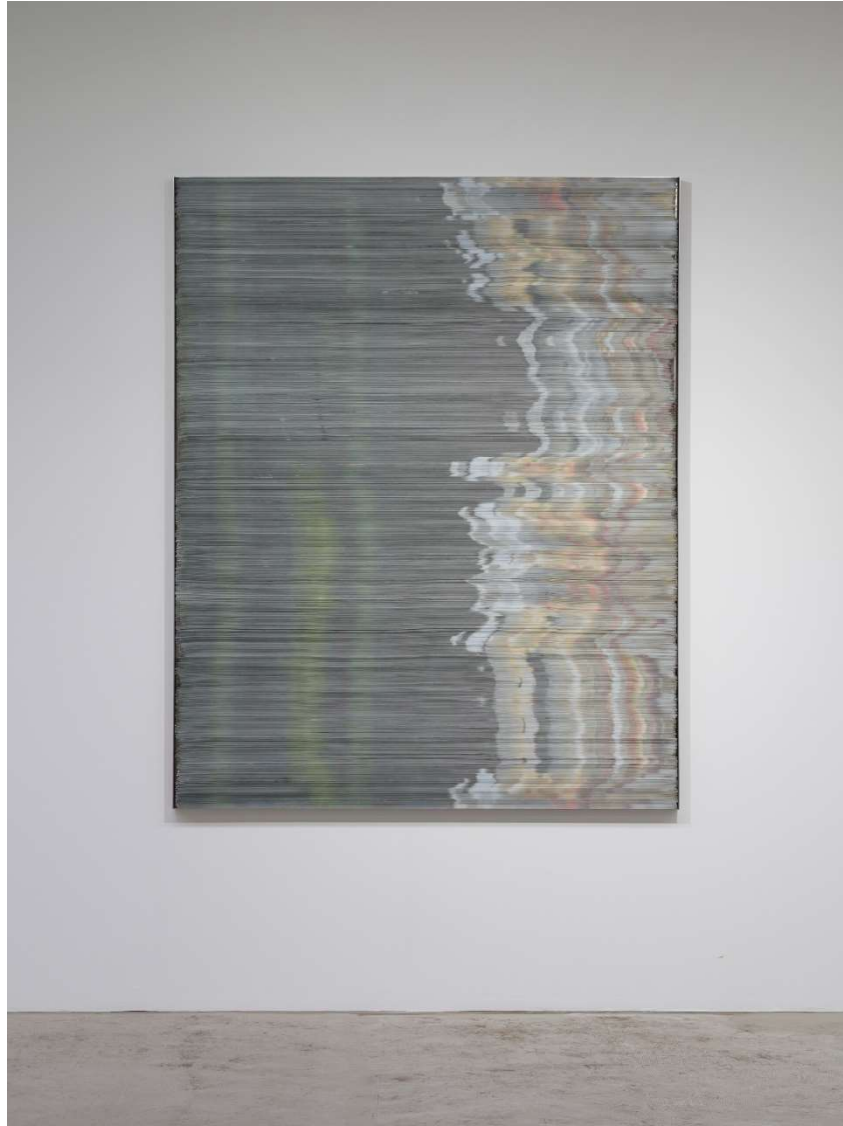
2025 年

インクジェットプリント

1048 x 1400 x 10 mm

自生地から国内に持ち込まれ野生化した外来種の植物を「帰化植物」と呼ぶが、2020 年以降、Nerhol はそれをモチーフにした作品を多数制作している。今回のモチーフは北米原産のハナミズキで、1912 年に東京市（当時）がワシントン D.C. に贈ったソメイヨシノの苗木の返礼として、3 年後にアメリカから贈呈された 60 本の原木が、日本における植生の始まり。その 60 本の原木のうち唯一現存する、東京都立園芸高等学校内に植樹されているハナミズキを、作家自身が撮影した動画を素材に制作されたのが本作。

今やハナミズキは最も数多く植えられる街路樹のひとつとなっている。広く親しまれる一方で、個々の存在やその歴史的背景を顧みられることのない街路樹として定着した経緯には、人為と因果が幾重にも絡み合っている。



Hidden crevasse No.004

2025 年

インクジェットプリント、ステンレス、アルミ、ベニヤ

2293 x 1836 x 50 mm

活動の初期から Nerhol が一貫して作品の素材としてきた「印刷して積み重ねた写真」を「横から見る」ことで、認知の次元の転換を試みた新作。シロツメクサの花を撮影した数十秒の短い動画を 20,000 以上のフレームに分割し、それを印刷して短冊状に裁断し、その 20,000 枚の短冊を積み重ねる、というプロセスで制作されている。

夥しい画像の断面が形作るノイズのような色の集積は、人間の感覚器官がとらえる閾値をはるかに超えた精細度をもつ。初期から一貫してイメージと物質の関係を問うてきた Nerhol の制作が、あらたな段階に歩を進めたことを示す重要な作品。当館の個展のために 5 点のシリーズとして制作された新作のうちの 1 点である。